源氏物語

桐壺

紫式部
與謝野晶子訳

紫のかがやく花と日の光思ひあはざる
ことわりもなし　（晶子）

どの天皇様の御代（みよ）であったか、女御（にょご）とか更衣（こうい）とかいわれる後宮（こうきゅう）がおおぜいいた中に、最上の貴族出身ではないが深い御愛寵（あいちょう）を得ている人があった。最初から自分こそはという自信と、親兄弟の勢力に恃（たの）む所があって宮中にはいった女御たちからは失敬な女としてねたまれた。その人と同等、もしくはそれより地位の低い更衣たちはまして嫉妬（しっと）の焔（ほのお）を燃やさないわけも

なかった。夜の御殿（おとど）の宿直所（とのいどころ）から退（さが）る朝、続いてその人ばかりが召される夜、目に見耳に聞いて口惜（くちお）しがらせた恨みのせいもあったかからだが弱くなって、心細くなった更衣は多く実家へ下がっていがちということになると、いよいよ帝（みかど）はこの人にばかり心をお引かれになるという御様子で、人が何と批評をしようともそれに御遠慮などというものがおできにならない。御聖徳を伝える歴史の上にも暗い影の一所残るようなこともなりかねない状態になった。高官たちも殿上役人たちも困って、御覚醒（かくせい）になるのを期しながら、当分は見ぬ顔をしていたいというほどの御

寵愛ぶりであった。唐の国でもこの種類の寵姫、楊家の女の出現によって乱が醸されたなどと蔭ではいわれる。今やこの女性が一天下の煩いだとされるに至った。馬嵬の駅がいつ再現されるかもしれぬ。その人にとっては堪えがたいような苦しい雰囲気の中でも、ただ深い御愛情だけをたよりにして暮らしていた。父の大納言はもう故人であった。母の未亡人が生まれのよい見識のある女で、わが娘を現代に勢力のある派手な家の娘たちにひけをとらせないよき保護者たりえた。それでも大官の後援者を持たぬ更衣は、何かの場合にいつも心細い思いをするようだった。

前生（ぜんしょう）の縁が深かったか、またもないような美しい皇子までがこの人からお生まれになった。寵姫を母とした御子（みこ）を早く御覧になりたい思召（おぼしめ）しから、正規の日数が立つとすぐに更衣母子（おやこ）を宮中へお招きになった。小皇子（しょうおうじ）はいかなる美なるものよりも美しいお顔をしておいでになった。帝の第一皇子は右大臣の娘の女御からお生まれになって、重い外戚（がいせき）が背景になっていて、疑いもない未来の皇太子として世の人は尊敬をささげているが、第二の皇子の美貌（びぼう）にならぶことがおできにならぬため、それは皇家（おうけ）の長子として大事にあそばされ、これは御自身の愛子（あいし）として非常に大事がっておい

でになった。更衣は初めから普通の朝廷の女官として奉仕するほどの軽い身分ではなかった。ただお愛しになるあまりに、その人自身は最高の貴女（きじょ）と言ってよいほどのりっぱな女ではあったが、始終おそばへお置きになろうとして、殿上で音楽その他のお催し事をあそばす際には、だれよりもまず先にこの人を常の御殿へお呼びになり、またある時はお引き留めになって更衣が夜の御殿から朝の退出ができずそのまま昼も侍しているようなことになったりして、やや軽いふうにも見られたのが、皇子のお生まれになって以後目に立って重々しくお扱いになったから、東宮にもどうかすれば

この皇子をお立てになるかもしれぬと、第一の皇子の御生母の女御は疑いを持っていた。この人は帝の最もお若い時に入内（じゅだい）した最初の女御であった。この女御がする批難と恨み言だけは無関心にしておいでになれなかった。この女御へ済まないという気も十分に持っておいでになった。帝の深い愛を信じながらも、悪く言う者と、何かの欠点を捜し出そうとする者ばかりの宮中に、病身な、そして無力な家を背景としている心細い更衣は、愛されれば愛されるほど苦しみがふえるふうであった。

住んでいる御殿（ごてん）は御所の中の東北の隅（すみ）のような桐壺（きりつぼ）

であった。幾つかの女御や更衣たちの御殿の廊（ろう）を通い路（みち）にして帝がしばしばそこへおいでになり、宿直（とのい）をする更衣が上がり下がりして行く桐壺であったから、始終ながめていねばならぬ御殿の住人たちの恨みが量（かさ）んでいくのも道理と言わねばならない。召されることがあまり続くころは、打ち橋とか通い廊下のある戸口とかに意地の悪い仕掛けがされて、送り迎えをする女房たちの着物の裾（すそ）が一度でいたんでしまうようなことがあったりする。またある時はどうしてもそこを通らねばならぬ廊下の戸に錠がさされてあったり、そこが通れねばこちらを行くはずの御殿の人どうしが言い合わ

せて、桐壺の更衣の通り路（みち）をなくして辱（はずか）しめるようなことなどもしばしばあった。数え切れぬほどの苦しみを受けて、更衣が心をめいらせているのを御覧になると帝はいっそう憐（あわ）れを多くお加えになって、清涼殿（せいりょうでん）に続いた後涼殿（こうりょうでん）に住んでいた更衣をほかへお移しになって桐壺の更衣へ休息室としてお与えになった。移された人の恨みはどの後宮（こうきゅう）よりもまた深くなった。

第二の皇子が三歳におなりになった時に袴着（はかまぎ）の式が行なわれた。前にあった第一の皇子のその式に劣らぬような派手（はで）な準備の費用が宮廷から支出された。それ

につけても世間はいろいろに批評をしたが、成長されるこの皇子の美貌（びぼう）と聡明（そうめい）さとが類のないものであったから、だれも皇子を悪く思うことはできなかった。有識者はこの天才的な美しい小皇子を見て、こんな人も人間世界に生まれてくるものかと皆驚いていた。その年の夏のことである。御息所（みやすどころ）――皇子女（おうじじょ）の生母になった更衣はこう呼ばれるのである――はちょっとした病気になって、実家へさがろうとしたが帝はお許しにならなかった。どこかからだが悪いということはこの人の常のことになっていたから、帝はそれほどお驚きにならずに、

「もうしばらく御所で養生をしてみてからにするがよい」

と言っておいでになるうちにしだいに悪くなって、そうなってからほんの五、六日のうちに病は重体になった。母の未亡人は泣く泣くお暇を願って帰宅させることにした。こんな場合にはまたどんな呪詛（じゅそ）が行なわれるかもしれない、皇子にまで禍（わざわ）いを及ぼしてはとの心づかいから、皇子だけを宮中にとどめて、目だたぬように御息所だけが退出するのであった。この上留めることは不可能であると帝は思召して、更衣が出かけて行くところを見送ることのできぬ御尊貴の御身

の物足りなさを堪えがたく悲しんでおいでになった。

はなやかな顔だちの美人が非常に瘦(や)せてしまって、心の中には帝とお別れして行く無限の悲しみがあったが口へは何も出して言うことのできないのがこの人の性質である。あるかないかに弱っているのを御覧になると帝は過去も未来も真暗(まっくら)になった気があそばすのであった。泣く泣くいろいろな頼もしい将来の約束をあそばされても更衣はお返辞もできないのである。目つきもよほどだるそうで、平生からなよなよとした人がいっそう弱々しいふうになって寝ているのであったから、これはどうなることであろうという不安が大御心(おおみこころ)

を襲うた。更衣が宮中から輦車で出てよい御許可の宣旨を役人へお下しになったりあそばされても、また病室へお帰りになると今行くということをお許しにならない。

「死の旅にも同時に出るのがわれわれ二人であるとあなたも約束したのだから、私を置いて家へ行ってしまうことはできないはずだ」

と、帝がお言いになると、そのお心持ちのよくわかる女も、非常に悲しそうにお顔を見て、

「限りとて別るる道の悲しきにいかまほしきは命な

りけり

死がそれほど私に迫って来ておりませんのでしたら」

これだけのことを息も絶え絶えに言って、なお帝にお言いしたいことがありそうであるが、まったく気力はなくなってしまった。死ぬのであったらこのまま自分のそばで死なせたいと帝は思召(おぼしめ)したが、今日から始めるはずの祈禱(きとう)も高僧たちが承っていて、それもぜひ今夜から始めねばなりませぬというようなことも申し上げて方々から更衣の退出を促すので、別れがたく思

召しながらお帰しになった。

帝はお胸が悲しみでいっぱいになってお眠りになることが困難であった。帰った更衣の家へお出しになる尋ねの使いはすぐ帰って来るはずであるが、それすら返辞を聞くことが待ち遠しいであろうと仰せられた帝であるのに、お使いは、

「夜半過ぎにお卒去（かくれ）になりました」

と言って、故大納言家の人たちの泣き騒いでいるのを見ると力が落ちてそのまま御所へ帰って来た。

更衣の死をお聞きになった帝のお悲しみは非常で、そのまま引きこもっておいでになった。その中でも忘

れがたみの皇子はそばへ置いておきたく思召したが、母の忌服中の皇子が、穢れのやかましい宮中においでになる例などはないので、更衣の実家へ退出されることになった。皇子はどんな大事があったともお知りにならず、侍女たちが泣き騒ぎ、帝のお顔にも涙が流れてばかりいるのだけを不思議にお思いになるふうであった。父子の別れというようなことはなんでもない場合でも悲しいものであるから、この時の帝のお心持ちほどお気の毒なものはなかった。

どんなに惜しい人でも遺骸は遺骸として扱われねばならぬ、葬儀が行なわれることになって、母の未亡人

は遺骸と同時に火葬の煙になりたいと泣きこがれてい
た。そして葬送の女房の車にしいて望んでいっしょに
乗って愛宕（おたぎ）の野にいかめしく設けられた式場へ着いた
時の未亡人の心はどんなに悲しかったであろう。

「死んだ人を見ながら、やはり生きている人のように
思われてならない私の迷いをさますために行く必要が
あります」

と賢そうに言っていたが、車から落ちてしまいそう
に泣くので、こんなことになるのを恐れていたと女房
たちは思った。

宮中からお使いが葬場へ来た。更衣に三位（さんみ）を贈られ

たのである。勅使がその宣命（せんみょう）を読んだ時ほど未亡人にとって悲しいことはなかった。三位は女御（にょご）に相当する位階である。生きていた日に女御とも言わせなかったことが帝（みかど）には残り多く思召されて贈位を賜わったのである。こんなことででも後宮のある人々は反感を持った。同情のある人は故人の美しさ、性格のなだらかさなどで憎むことのできなかった人であると、今になって桐壺の更衣（こうい）の真価を思い出していた。あまりにひどい御殊寵（しゅちょう）ぶりであったからその当時は嫉妬（しっと）を感じたのであるとそれらの人は以前のことを思っていた。優しい同情深い女性であったのを、帝付きの女官たち

は皆恋しがっていた。「なくてぞ人は恋しかりける」とはこうした場合のことであろうと見えた。時は人の悲しみにかかわりもなく過ぎて七日七日の仏事が次々に行なわれる、そのたびに帝からはお弔いの品々が下された。

　愛人の死んだのちの日がたっていくにしたがってどうしようもない寂しさばかりを帝はお覚えになるのであって、女御、更衣を宿直（とのい）に召されることも絶えてしまった。ただ涙の中の御朝夕であって、拝見する人までがしめっぽい心になる秋であった。

「死んでからまでも人の気を悪くさせる御寵愛ぶり

ね」
などと言って、右大臣の娘の弘徽殿（こきでん）の女御（にょご）などは今さえも嫉妬を捨てなかった。帝は一の皇子を御覧になっても更衣の忘れがたみの皇子の恋しさばかりをお覚えになって、親しい女官や、御自身のお乳母（めのと）などをその家へおつかわしになって若宮の様子を報告させておいでになった。

野分（のわき）ふうに風が出て肌寒（はださむ）の覚えられる日の夕方に、平生よりもいっそう故人がお思われになって、靫負（ゆげい）の命婦（みょうぶ）という人を使いとしてお出しになった。夕月夜の美しい時刻に命婦を出かけさせて、そのまま深い物思

いをしておいでになった。以前にこうした月夜は音楽の遊びが行なわれて、更衣はその一人に加わってすぐれた音楽者の素質を見せた。またそんな夜に詠(よ)む歌なども平凡ではなかった。彼女の幻は帝のお目に立ち添って少しも消えない。しかしながらどんなに濃い幻でも瞬間の現実の価値はないのである。

命婦は故大納言(だいなごん)家に着いて車が門から中へ引き入れられた刹那(せつな)からもう言いようのない寂しさが味わわれた。未亡人の家であるが、一人娘のために住居(すまい)の外見などにもみすぼらしさがないようにと、りっぱな体裁を保って暮らしていたのであるが、子を失った女主人(おんなあるじ)

の無明(むみょう)の日が続くようになってからは、しばらくのうちに庭の雑草が行儀悪く高くなった。またこのごろの野分の風でいっそう邸内が荒れた気のするのであったが、月光だけは伸びた草にもさわらずさし込んだその南向きの座敷に命婦を招じて出て来た女主人はすぐにもものが言えないほどまたも悲しみに胸をいっぱいにしていた。

「娘を死なせました母親がよくも生きていられたものというように、運命がただ恨めしゅうございますのに、こうしたお使いが荒(あば)ら屋へおいでくださるとまたいっそう自分が恥ずかしくてなりません」

と言って、実際堪えられないだろうと思われるほど泣く。

「こちらへ上がりますと、またいっそうお気の毒になりまして、魂も消えるようでございますと、先日典侍(ないしのすけ)は陛下へ申し上げていらっしゃいましたが、私のようなあさはかな人間でもほんとうに悲しさが身にしみます」

と言ってから、しばらくして命婦は帝の仰せを伝えた。

「当分夢ではないであろうかというようにばかり思われましたが、ようやく落ち着くとともに、どうしよう

もない悲しみを感じるようになりました。こんな時はどうすればよいのか、せめて話し合う人があればいいのですがそれもありません。目だたぬようにして時々御所へ来られてはどうですか。若宮を長く見ずにいて気がかりでならないし、また若宮も悲しんでおられる人ばかりの中にいてかわいそうですから、彼を早く宮中へ入れることにして、あなたもいっしょにおいでなさい」

「こういうお言葉ですが、涙にむせ返っておいでになって、しかも人に弱さを見せまいと御遠慮をなさらないでもない御様子がお気の毒で、ただおおよそだけ

を承っただけでまいりました」
と言って、また帝のお言(こと)づてのほかの御消息を渡した。
「涙でこのごろは目も暗くなっておりますが、過分なかたじけない仰せを光明にいたしまして」
未亡人はお文(ふみ)を拝見するのであった。
時がたてば少しは寂しさも紛れるであろうかと、そんなことを頼みにして日を送っていても、日がたてばたつほど悲しみの深くなるのは困ったことである。どうしているかとばかり思いやっている小児(こども)も、そろった両親に育てられる幸福を失ったものであるか

ら、子を失ったあなたに、せめてその子の代わりとして面倒(めんどう)を見てやってくれることを頼む。

などこまごまと書いておありになった。

宮城野(みやぎの)の露吹き結ぶ風の音(おと)に小萩(こはぎ)が上を思ひこそやれ

という御歌もあったが、未亡人はわき出す涙が妨げて明らかには拝見することができなかった。

「長生きをするからこうした悲しい目にもあうのだと、それが世間の人の前に私をきまり悪くさせることなの

でございますから、まして御所へ時々上がることなどは思いもよらぬことでございます。もったいない仰せを伺っているのですが、私が伺候いたしますことは今後も実行はできないでございましょう。若宮様は、やはり御父子の情というものが本能にありますものと見えて、御所へ早くおはいりになりたい御様子をお見せになりますから、私はごもっともだとおかわいそうに思っておりますということなどは、表向きの奏上でなしに何かのおついでに申し上げてくださいませ。良人（おっと）も早く亡（な）くしますし、娘も死なせてしまいましたような不幸ずくめの私が御いっしょにおりますことは、若

宮のために縁起のよろしくないことと恐れ入っております」

などと言った。そのうち若宮ももうお寝(やす)みになった。

「またお目ざめになりますのをお待ちして、若宮にお目にかかりまして、くわしく御様子も陛下へ御報告したいのでございますが、使いの私の帰りますのをお待ちかねでもいらっしゃいますでしょうから、それではあまりおそくなるでございましょう」

と言って命婦は帰りを急いだ。

「子をなくしました母親の心の、悲しい暗さがせめて一部分でも晴れますほどの話をさせていただきたいの

ですから、公のお使いでなく、気楽なお気持ちでお休みがてらまたお立ち寄りください。以前はうれしいことでよくお使いにおいでくださいましたのでしたが、こんな悲しい勅使であなたをお迎えするとは何ということでしょう。返す返す運命が私に長生きさせるのが苦しゅうございます。故人のことを申せば、生まれました時から親たちに輝かしい未来の望みを持たせました子で、父の大納言（だいなごん）はいよいよ危篤になりますまで、この人を宮中へ差し上げようと自分の思ったことをぜひ実現させてくれ、自分が死んだからといって今までの考えを捨てるようなことをしてはならないと、何度

も何度も遺言いたしましたが、確かな後援者なしの宮仕えは、かえって娘を不幸にするようなものではないだろうかとも思いながら、私にいたしましてはただ遺言を守りたいばかりに陛下へ差し上げましたが、過分な御寵愛を受けまして、そのお光でみすぼらしさも隠していただいて、娘はお仕えしていたのでしょうが、皆さんの御嫉妬の積もっていくのが重荷になりまして、寿命で死んだとは思えませんような死に方をいたしましたのですから、陛下のあまりに深い御愛情がかえって恨めしいように、盲目的な母の愛から私は思いもいたします」

こんな話をまだ全部も言わないで未亡人は涙でむせ返ってしまったりしているうちにますます深更になった。

「それは陛下も仰せになります。自分の心でありながらあまりに穏やかでないほどの愛しようをしたのも前生(ぜんしょう)の約束で長くはいっしょにおられぬ二人であることを意識せずに感じていたのだ。自分らは恨めしい因縁でつながれていたのだ、自分は即位(そくい)してから、だれのためにも苦痛を与えるようなことはしなかったという自信を持っていたが、あの人によって負ってならぬ女の恨みを負い、ついには何よりもたいせつなもの

を失って、悲しみにくれて以前よりももっと愚劣な者になっているのを思うと、自分らの前生の約束はどんなものであったか知りたいとお話しになって湿っぽい御様子ばかりをお見せになっています」

どちらも話すことにきりがない。命婦（みょうぶ）は泣く泣く、

「もう非常に遅（おそ）いようですから、復命は今晩のうちにいたしたいと存じますから」

と言って、帰る仕度（したく）をした。落ちぎわに近い月夜の空が澄み切った中を涼しい風が吹き、人の悲しみを促すような虫の声がするのであるから帰りにくい。

鈴虫の声の限りを尽くしても長き夜飽かず降る涙
かな

車に乗ろうとして命婦はこんな歌を口ずさんだ。

「いとどしく虫の音(ね)しげき浅茅生(あさぢふ)に露置き添ふる雲
の上人(うへびと)

かえって御訪問が恨めしいと申し上げたいほどで
す」

と未亡人は女房に言わせた。意匠を凝らせた贈り物

などする場合でなかったから、故人の形見ということにして、唐衣（からぎぬ）と裳（も）の一揃（ひとそろ）えに、髪上げの用具のはいった箱を添えて贈った。

若い女房たちの更衣の死を悲しむのはむろんであるが、宮中住まいをしなれていて、寂しく物足らず思われることが多く、お優しい帝（みかど）の御様子を思ったりして、若宮が早く御所へお帰りになるようにと促すのであるが、不幸な自分がごいっしょに上がっていることも、また世間に批難の材料を与えるようなものであろうし、またそれかといって若宮とお別れしている苦痛にも堪（た）えきれる自信がないと未亡人は思うので、結局若宮の

宮中入りは実行性に乏しかった。

　御所へ帰った命婦は、まだ宵（よい）のままで御寝室へはいっておいでにならない帝を気の毒に思った。中庭の秋の花の盛りなのを愛していらっしゃるふうをあそばして凡庸でない女房四、五人をおそばに置いて話をしておいでになるのであった。このごろ始終帝の御覧になるものは、玄宗（げんそう）皇帝と楊貴妃（ようきひ）の恋を題材にした白楽天の長恨歌（ちょうごんか）を、亭子院（ていしいん）が絵にあそばして、伊勢（いせ）や貫之（つらゆき）に歌をお詠（よ）ませになった巻き物で、そのほか日本文学でも、支那（しな）のでも、愛人に別れた人の悲しみが歌われたものばかりを帝はお読みになった。帝は命婦にこま

ごまと大納言（だいなごん）家の様子をお聞きになった。身にしむ思いを得て来たことを命婦は外へ声をはばかりながら申し上げた。未亡人の御返事を帝は御覧になる。

もったいなさをどう始末いたしてよろしゅうございますやら。こうした仰せを承りましても愚か者はただ悲しい悲しいとばかり思われるのでございます。

　荒き風防ぎし蔭（かげ）の枯れしより小萩（こはぎ）が上ぞしづ心無き

というような、歌の価値の疑わしいようなものも書

かれてあるが、悲しみのために落ち着かない心で詠(よ)んでいるのであるからと寛大に御覧になった。帝はある程度まではおさえていねばならぬ悲しみであると思召すが、それが御困難であるらしい。はじめて桐壺(きりつぼ)の更衣(こうい)の上がって来たころのことなどまでがお心の表面に浮かび上がってきてはいっそう暗い悲しみに帝をお誘いした。その当時しばらく別れているということさえも自分にはつらかったのに、こうして一人でも生きていられるものであると思うと自分は偽り者のような気がするとも帝はお思いになった。

「死んだ大納言の遺言を苦労して実行した未亡人への

酬(むく)いは、更衣を後宮の一段高い位置にすえることだ、そうしたいと自分はいつも思っていたが、何もかも皆夢になった」

とお言いになって、未亡人に限りない同情をしておいでになった。

「しかし、あの人はいなくても若宮が天子にでもなる日が来れば、故人に后(きさき)の位を贈ることもできる。それまで生きていたいとあの夫人は思っているだろう」

などという仰せがあった。命婦(みょうぶ)は贈られた物を御前(おまえ)へ並べた。これが唐(から)の幻術師が他界の楊貴妃(ようきひ)に逢(あ)って得て来た玉の簪(かざし)であったらと、帝はかいないことも

お思いになった。

尋ね行くまぼろしもがなつてにても魂（たま）のありかを
そこと知るべく

絵で見る楊貴妃はどんなに名手の描（か）いたものでも、絵における表現は限りがあって、それほどのすぐれた顔も持っていない。太液（たいえき）の池の蓮花（れんげ）にも、未央宮（びおうきゅう）の柳の趣にもその人は似ていたであろうが、また唐（から）の服装は華美ではあったであろうが、更衣の持った柔らかい美、艶（えん）な姿態をそれに思い比べて御覧になると、これ

は花の色にも鳥の声にもたとえられぬ最上のものであった。お二人の間はいつも、天に在（あ）っては比翼の鳥、地に生まれれば連理の枝という言葉で永久の愛を誓っておいでになったが、運命はその一人に早く死を与えてしまった。秋風の音（ね）にも虫の声にも帝が悲しみを覚えておいでになる時、弘徽殿（こきでん）の女御（にょご）はもう久しく夜の御殿（おとど）の宿直（とのい）にもお上がりせずにいて、今夜の月明に更（ふ）けるまでその御殿で音楽の合奏をさせているのを帝は不愉快に思召した。このころの帝のお心持ちをよく知っている殿上役人や帝付きの女房なども皆弘徽殿の楽音に反感を持った。負けぎらいな性質の人で更衣の

死などは眼中にないというふうをわざと見せているのであった。

月も落ちてしまった。

　雲の上も涙にくるる秋の月いかですむらん浅茅生（あさぢふ）の宿

命婦が御報告した故人の家のことをなお帝は想像あそばしながら起きておいでになった。右近衛府（うこんえふ）の士官が宿直者の名を披露（ひろう）するのをもってすれば午前二時になったのであろう。人目をおはばか

りになってからも安眠を得たもうことはできなかった。

朝のお目ざめにもまた、夜明けも知らずに語り合った昔の御追憶がお心を占めて、寵姫(ちょうき)の在(あ)った日も亡(な)いのちも朝の政務はお怠りになることになる。お食欲もない。簡単な御朝食はしるしだけお取りになるが、帝王の御朝餐(ちょうさん)として用意される大床子(だいしょうじ)のお料理などは召し上がらないものになっていた。それには殿上役人のお給仕がつくのであるが、それらの人は皆この状態を歎(なげ)いていた。すべて側近する人は男女の別なしに困ったことであると歎いた。よくよく深い前生の御縁

で、その当時は世の批難も後宮の恨みの声もお耳には留まらず、その人に関することだけは正しい判断を失っておしまいになり、また死んだあとではこうして悲しみに沈んでおいでになって政務も何もお顧みにならない、国家のためによろしくないことであるといって、支那（しな）の歴朝の例までも引き出して言う人もあった。

幾月かののちに第二の皇子が宮中へおはいりになった。ごくお小さい時ですらこの世のものとはお見えにならぬ御美貌の備わった方であったが、今はまたいっそう輝くほどのものに見えた。その翌年立太子のことがあった。帝の思召（おぼしめ）しは第二の皇子にあったが、だれ

という後見の人がなく、まだだれもが肯定しないことであるのを悟っておいでになって、かえってその地位は若宮の前途を危険にするものであるとお思いになって、御心中をだれにもお洩(も)らしにならなかった。東宮におなりになったのは第一親王である。この結果を見て、あれほどの御愛子でもやはり太子にはおできにならないのだと世間も言い、弘徽殿(こきでん)の女御(にょご)も安心した。その時から宮の外祖母の未亡人は落胆して更衣のいる世界へ行くことのほかには希望もないと言って一心に御仏(みほとけ)の来迎(らいごう)を求めて、とうとう亡(な)くなった。帝はまた若宮が祖母を失われたことでお悲しみになった。これ

は皇子が六歳の時のことであるから、今度は母の更衣の死に逢(あ)った時とは違い、皇子は祖母の死を知ってお悲しみになった。今まで始終お世話を申していた宮とお別れするのが悲しいということばかりを未亡人は言って死んだ。

それから若宮はもう宮中にばかりおいでになることになった。七歳の時に書初め(ふみはじめ)の式が行なわれて学問をお始めになったが、皇子の類のない聡明(そうめい)さに帝はお驚きになることが多かった。

「もうこの子をだれも憎むことができないでしょう。母親のないという点だけででもかわいがっておやりな

さい」
と帝はお言いになって、弘徽殿へ昼間おいでになる時もいっしょにおつれになったりしてそのまま御簾（みす）の中にまでもお入れになった。どんな強さ一方の武士だっても仇敵（きゅうてき）だってもこの人を見ては笑（え）みが自然にわくであろうと思われる美しい少童（しょうどう）でおありになったから、女御も愛を覚えずにはいられなかった。この女御は東宮のほかに姫宮をお二人お生みしていたが、その方々よりも第二の皇子のほうがおきれいであった。姫宮がたもお隠れにならないで賢い遊び相手としてお扱いになった。学問はもとより音楽の才も豊かであっ

た。言えば不自然に聞こえるほどの天才児であった。

その時分に高麗人（こまうど）が来朝した中に、上手（じょうず）な人相見の者が混じっていた。帝はそれをお聞きになったが、宮中へお呼びになることは亭子院のお誡（いまし）めがあっておできにならず、だれにも秘密にして皇子のお世話役のようになっている右大弁（うだいべん）の子のように思わせて、皇子を外人の旅宿する鴻臚館（こうろかん）へおやりになった。

相人は不審そうに頭（こうべ）をたびたび傾けた。

「国の親になって最上の位を得る人相であって、さてそれでよいかと拝見すると、そうなることはこの人の幸福な道でない。国家の柱石になって帝王の輔佐をす

る人として見てもまた違うようです」
と言った。弁も漢学のよくできる官人であったから、筆紙をもってする高麗人との問答にはおもしろいものがあった。詩の贈答もして高麗人はもう日本の旅が終わろうとする期に臨んで珍しい高貴の相を持つ人に逢ったことは、今さらにこの国を離れがたくすることであるというような意味の作をした。若宮も送別の意味を詩にお作りになったが、その詩を非常にほめていろいろなその国の贈り物をしたりした。

朝廷からも高麗の相人へ多くの下賜品があった。その評判から東宮の外戚の右大臣などは第二の皇子と高

麗の相人との関係に疑いを持った。好遇された点が腑（ふ）に落ちないのである。聡明（そうめい）な帝は高麗人の言葉以前に皇子の将来を見通して、幸福な道を選ぼうとしておいでになった。それでほとんど同じことを占った相人に価値をお認めになったのである。四品（しほん）以下の無品（むほん）親王などで、心細い皇族としてこの子を置きたくない、自分の代もいつ終わるかしれぬのであるから、将来に最も頼もしい位置をこの子に設けて置いてやらねばならぬ、臣下の列に入れて国家の柱石たらしめることがいちばんよいと、こうお決めになって、以前にもましていろいろの勉強をおさせになった。大きな天才らしい

点の現われてくるのを御覧になると人臣にするのが惜しいというお心になるのであったが、親王にすれば天子に変わろうとする野心を持つような疑いを当然受けそうにお思われになった。上手な運命占いをする者にお尋ねになっても同じような答申をするので、元服後は源姓を賜わって源氏の某（なにがし）としようとお決めになった。

年月がたっても帝は桐壺の更衣との死別の悲しみをお忘れになることができなかった。慰みになるかと思召して美しい評判のある人などを後宮へ召されることもあったが、結果はこの世界には故更衣の美に準ずる

だけの人もないのであるという失望をお味わいになっただけである。そうしたころ、先帝――帝(みかど)の従兄(いとこ)あるいは叔父君(おじぎみ)――の第四の内親王でお美しいことをだれも言う方で、母君のお后(きさき)が大事にしておいでになる方のことを、帝のおそばに奉仕している典侍(ないしのすけ)は先帝の宮廷にいた人で、后の宮へも親しく出入りしていて、内親王の御幼少時代をも知り、現在でもほのかにお顔を拝見する機会を多く得ていたから、帝へお話しした。

「お亡(かく)れになりました御息所(みやすどころ)の御容貌(ようぼう)に似た方を、三代も宮廷におりました私すらまだ見たことがございま

せんでしたのに、后の宮様の内親王様だけがあの方に似ていらっしゃいますことにはじめて気がつきました。非常にお美しい方でございます」

もしそんなことがあったらと大御心（おおみこころ）が動いて、先帝の后の宮へ姫宮の御入内（ごじゅだい）のことを懇切にお申し入れになった。お后は、そんな恐ろしいこと、東宮のお母様の女御（にょご）が並みはずれな強い性格で、桐壺の更衣（こうい）が露骨ないじめ方をされた例もあるのに、と思召して話はそのままになっていた。そのうちお后もお崩（かく）れになった。姫宮がお一人で暮らしておいでになるのを帝はお聞きになって、

「女御というよりも自分の娘たちの内親王と同じように思って世話がしたい」

となおも熱心に入内をお勧めになった。こうしておいでになって、母宮のことばかりを思っておいでになるよりは、宮中の御生活にお帰りになったら若いお心の慰みにもなろうと、お付きの女房やお世話係の者が言い、兄君の兵部卿（ひょうぶきょう）親王もその説に御賛成になって、それで先帝の第四の内親王は当帝の女御におなりになった。御殿は藤壺（ふじつぼ）である。典侍の話のとおりに、姫宮の容貌も身のおとりなしも不思議なまで、桐壺の更衣に似ておいでになった。この方は御身分に批（ひ）の打ち

所がない。すべてごりっぱなものであって、だれも貶（おとし）める言葉を知らなかった。桐壺の更衣は身分と御愛寵とに比例の取れぬところがあった。お傷手（いたで）が新女御の宮で癒（いや）されたともいえないであろうが、自然に昔は昔として忘れられていくようになり、帝にまた楽しい御生活がかえってきた。あれほどのこともやはり永久不変でありえない人間の恋であったのであろう。

源氏の君――まだ源姓にはなっておられない皇子であるが、やがてそうおなりになる方であるから筆者はこう書く。――はいつも帝のおそばをお離れしないのであるから、自然どの女御の御殿へも従って行く。帝

がことにしばしばおいでになる御殿は藤壺（ふじつぼ）であって、お供して源氏のしばしば行く御殿は藤壺である。宮もお馴（な）れになって隠れてばかりはおいでにならなかった。どの後宮でも容貌の自信がなくて入内した者はないのであるから、皆それぞれの美を備えた人たちであったが、もう皆だいぶ年がいっていた。その中へ若いお美しい藤壺の宮が出現されてその方は非常に恥ずかしがってなるべく顔を見せぬようにとなすっても、自然に源氏の君が見ることになる場合もあった。母の更衣は面影も覚えていないが、よく似ておいでになると典侍が言ったので、子供心に母に似た人として恋しく、

いつも藤壺へ行きたくなって、あの方と親しくなりたいという望みが心にあった。帝には二人とも最愛の妃であり、最愛の御子であった。

「彼を愛しておやりなさい。不思議なほどあなたとこの子の母とは似ているのです。失礼だと思わずにかわいがってやってください。この子の目つき顔つきがまたよく母に似ていますから、この子とあなたとを母と子と見てもよい気がします」

など帝がおとりなしになると、子供心にも花や紅葉（もみじ）の美しい枝は、まずこの宮へ差し上げたい、自分の好意を受けていただきたいというこんな態度をとるよう

になった。現在の弘徽殿の女御の嫉妬（しっと）の対象は藤壺の宮であったからそちらへ好意を寄せる源氏に、一時忘れられていた旧怨（きゅうえん）も再燃して憎しみを持つことになった。女御が自慢にし、ほめられてもおいでになる幼内親王方の美を遠くこえた源氏の美貌（びぼう）を世間の人は言い現わすために光（ひかる）の君（きみ）と言った。女御として藤壺の宮の御寵愛（ちょうあい）が並びないものであったから対句のように作って、輝く日の宮と一方を申していた。

源氏の君の美しい童形（どうぎょう）をいつまでも変えたくないように帝は思召したのであったが、いよいよ十二の歳（とし）に元服をおさせになることになった。その式の準備も

何も帝御自身でお指図になった。前に東宮の御元服の式を紫宸殿であげられた時の派手やかさに落とさず、その日官人たちが各階級別々にさずかる饗宴の仕度を内蔵寮、穀倉院などでするのはつまり公式の仕度で、それでは十分でないと思召して、特に仰せがあって、それらも華麗をきわめたものにされた。

清涼殿は東面しているが、お庭の前のお座敷に玉座の椅子がすえられ、元服される皇子の席、加冠役の大臣の席がそのお前にできていた。午後四時に源氏の君が参った。上で二つに分けて耳の所で輪にした童形の礼髪を結った源氏の顔つき、少年の美、これを永久に

保存しておくことが不可能なのであろうかと惜しまれた。理髪の役は大蔵卿（おおくらきょう）である。美しい髪を短く切るのを惜しく思うふうであった。帝は御息所（みやすどころ）がこの式を見たならばと、昔をお思い出しになることによって堪えがたくなる悲しみをおさえておいでになった。加冠が終わって、いったん休息所（きゅうそくじょ）に下がり、そこで源氏は服を変えて庭上の拝をした。参列の諸員は皆小さい大宮人の美に感激の涙をこぼしていた。帝はまして御自制なされがたい御感情があった。藤壺の宮をお得になって以来、紛れておいでになることもあった昔の哀愁が今一度にお胸へかえって来たのである。まだ小さ

くて大人（おとな）の頭の形になることは、その人の美を損じさせはしないかという御懸念もおありになったのであるが、源氏の君には今驚かれるほどの新彩が加わって見えた。加冠の大臣には夫人の内親王との間に生まれた令嬢があった。東宮から後宮にとお望みになったのをお受けせずにお返辞（へんじ）を躊躇（ちゅうちょ）していたのは、初めから源氏の君の配偶者に擬していたからである。大臣は帝の御意向をも伺った。

「それでは元服したのちの彼を世話する人もいることであるから、その人をいっしょにさせればよい」

という仰せであったから、大臣はその実現を期して

いた。

今日の侍所（さむらいどころ）になっている座敷で開かれた酒宴に、親王方の次の席へ源氏は着いた。娘の件を大臣がほのめかしても、きわめて若い源氏は何とも返辞をすることができないのであった。帝のお居間のほうから仰せによって内侍（ないし）が大臣を呼びに来たので、大臣はすぐに御前へ行った。加冠役としての下賜品はおそばの命婦が取り次いだ。白い大袿（おおうちぎ）に帝のお召し料のお服が一襲（ひとかさね）で、これは昔から定まった品である。酒杯を賜わる時に、次の歌を仰せられた。

いときなき初元結ひに長き世を契る心は結びこめ
つや

大臣の女（むすめ）との結婚にまでお言い及ぼしになった御製は大臣を驚かした。

結びつる心も深き元結ひに濃き紫の色しあせずば

と返歌を奏上してから大臣は、清涼殿（せいりょうでん）の正面の階段（きざはし）を下がって拝礼をした。左馬寮（さまりょう）の御馬と蔵人所（くろうどどころ）の鷹（たか）をその時に賜わった。そのあとで諸員が階前に出

て、官等に従ってそれぞれの下賜品を得た。この日の御饗宴（きょうえん）の席の折り詰めのお料理、籠（かご）詰めの菓子などは皆右大弁（うだいべん）が御命令によって作った物であった。一般の官吏に賜う弁当の数、一般に下賜される絹を入れた箱の多かったことは、東宮の御元服の時以上であった。

　その夜源氏の君は左大臣家へ婿になって行った。この儀式にも善美は尽くされたのである。高貴な美少年の婿を大臣はかわいく思った。姫君のほうが少し年上であったから、年下の少年に配されたことを、不似合いに恥ずかしいことに思っていた。この大臣は大きい勢力を持った上に、姫君の母の夫人は帝の御同胞で

あったから、あくまでもはなやかな家である所へ、今度また帝の御愛子の源氏を婿に迎えたのであるから、東宮の外祖父で未来の関白と思われている右大臣の勢力は比較にならぬほど気押（けお）されていた。左大臣は何人かの妻妾（さいしょう）から生まれた子供を幾人も持っていた。内親王腹のは今蔵人（くろうど）少将であって年少の美しい貴公子であるのを左右大臣の仲はよくないのであるが、その蔵人少将をよその者に見ていることができず、大事にしている四女の婿にした。これも左大臣が源氏の君をたいせつがるのに劣らず右大臣から大事な婿君としてかしずかれていたのはよい一対のうるわしいことであっ

た。

　源氏の君は帝がおそばを離しにくくあそばすので、ゆっくりと妻の家に行っていることもできなかった。源氏の心には藤壺（ふじつぼ）の宮の美が最上のものに思われてあのような人を自分も妻にしたい、宮のような女性はもう一人とないであろう、左大臣の令嬢は大事にされて育った美しい貴族の娘とだけはうなずかれるが、こんなふうに思われて単純な少年の心には藤壺の宮のことばかりが恋しくて苦しいほどであった。元服後の源氏はもう藤壺の御殿の御簾（みす）の中へは入れていただけなかった。琴や笛の音（ね）の中にその方がお弾（ひ）きになる物の

声を求めるとか、今はもう物越しにより聞かれないほのかなお声を聞くとかが、せめてもの慰めになって宮中の宿直(とのい)ばかりが好きだった。五、六日御所にいて、二、三日大臣家へ行くなど絶え絶えの通い方を、まだ少年期であるからと見て大臣はとがめようとも思わず、相も変わらず婿君のかしずき騒ぎをしていた。新夫婦付きの女房はことにすぐれた者をもってしたり、気に入りそうな遊びを催したり、一所懸命である。御所では母の更衣のもとの桐壺を源氏の宿直所にお与えになって、御息所(みやすどころ)に侍していた女房をそのまま使わせておいでになった。更衣の家のほうは修理(しゅり)の役所、

内匠寮(たくみりょう)などへ帝がお命じになって、非常なりっぱなものに改築されたのである。もとから築山(つきやま)のあるよい庭のついた家であったが、池なども今度はずっと広くされた。二条の院はこれである。源氏はこんな気に入った家に自分の理想どおりの妻と暮らすことができたらと思って始終歎息(たんそく)をしていた。

光(ひかる)の君という名は前に鴻臚館(こうろかん)へ来た高麗人(こまうど)が、源氏の美貌(びぼう)と天才をほめてつけた名だとそのころ言われたそうである。

底本：「全訳源氏物語　上巻」角川文庫、角川書店
１９７１（昭和46）年８月10日改版初版発行
１９９４（平成６）年12月20日56版発行
※このファイルは、古典総合研究所（http://www.genji.co.jp/）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。
※校正には、２００２（平成14）年４月５日71版を使用しました。
入力：上田英代
校正：kompass
２００３年４月15日作成